
IS ~ The Gate War ~

のーべん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS\The Gate War\

【Nコード】

N6068V

【作者名】

のーべん

【あらすじ】

クオヴレーが次に転移してきたのは、女性しか扱えない兵器、ISの存在する世界だった。

彼は、この世界での平行世界の番人としての戦いを始める。

始めまして、のーべんです。身内向けにちょこちょこ書いたりもしていますが、IS2次は始めてです。

注意事項

作者に原作知識はなく、アニメも2話までしか見ていません。ただいま本編勉強中でございます。

用語は大半がwikipedia先生からです。

転移してきたクオヴレーは、基本的に作中最強クラスの技量を持ちます。

一夏ハーレムは継続路線です。

男同士の友情と、平行世界の番人としてのクオヴレーの活躍がメインになります。

スーパ―不定期更新です。

以上の事柄が許せる方で、見てやんよ！ という方は本編へお進みください。

人物紹介（ネタバレあり/随時更新）（前書き）

ちよつとした息抜きで、やってみました。

まだまだ登場キャラ少ないですけど。

なお、人物紹介は割と自由ですが、こちらが本来の作者のノリです。
危険を感じたらブラウザの戻るをクリック！

人物紹介（ネタバレあり/随時更新）

クオヴレー・ゴードン

我らが主人公。ずば抜けた身体能力、射撃センスを持ち、機動兵器の操縦技術も高い。

判断力も傑出し、冷静でもあるが、情に厚い一面も持ち合わせる。というのに、作者の好みで、割と容赦ない言葉をぶついたりする。

手先は器用で、複雑な刺繍を縫ったりする特技あり。料理なども優れているはず。

その老成した人格で、原作キャラの大半を導くポジションに立つと思われる。

フラグを立てる能力は高めだが、成長フラグ以外はことごとく打ち碎いてきた実績を持つ。

「碎け散るんだ……！」

忘れている人もいるかもしれないが、元は戦闘用の人造人間、アイン・バルシエム。戦闘力が高いのはそのため。

ちなみに、自称アメリカ国籍。

使用ISは「打鉄」

以下余談でござる

発音しづらい名前から、ファンからの通称は久保。勿論作者も久保と呼ぶ。

あまりの久保の浸透具合に、なんと作者は当初、タイトルをIS（インフィニット・久保ラトス）にしようとしたほど。

結局知人の猛反対にあい、現在のタイトルに落ち着いた。

織斑 一夏

原作の主人公。恐るべきフラグ体質。そして無敵の朴念仁。立つフラグは揃いも揃って恋愛フラグ。こんちくせう。

立てるだけ立てて、後は放置で他の人と立て始める。こんちくせう。

端正なルックス、気遣いがあり優しい性格、家事万能、とそれに見合うスキルも持つ。

その上、女子だけの学園に飛ばされるという能力まで持つ。おい、俺とかわ……ウボアー

フラグ体質すぎっから、死亡フラグもたつんだろっ、とか思う時あるけれど、結局恋愛フラグ。貴様ア！

姉がいる。怖いけど大切。

当初、クオヴレーを発音できず、久保レと言ってしまったが、6話にてとうとうまともに発音できるようになった。

専用機は「白式」

織斑 千冬

IS学園1年1組クラス担任にして、一夏の実姉。第1回ガンダムファイトを勝ち抜き、初代ガンダム・ザ・ガンダム……嘘です。

ISの世界大会、モンド・グロツソの優勝者で、初代ブリュンヒルデの称号を持つ女傑。

どうやら、ガンダムファイターとまではいかないまでも、その途上程度（といっても人外）戦闘力もっているようだ。

主な武器は出席簿と鉄拳。ダンクーガのパイロットにどうぞ。厳格な人物だが、弟を大切にしている。ブラコン気味かもしれない。クオヴレーに対しては割と好意的。

セシリア・オルコット

グレートブリテン及び北アイルランド連合王国、通称イギリス、正式名称ユナイテッド・キングダムの国家代表候補生。

パツキングロマブナオン。プライド高め。自分の実力に自信を持っていただけクオヴレーに負けました。

そんなわけで、自分を負かしたクオヴレーに師事する。師弟フラグって誰得。

過去に色々あった。割と濃密な人生を送っている。それでも、クオヴレーほどカオスな人生ではない。

専用機は、パツと見ストフリ、武器は”ファンネルもどき”の第3世代「ブルー・ティアーズ」

篠ノ之 篤

刀の人。

マッドサイエンティスト、早乙女博士……じゃなかった、篠ノ之束の妹。織斑姉弟にとっては幼馴染。

最初から一夏に惚れている。世間の人気を無視して、作者は見た瞬間お気に入り。どこがって刀。

作者は刀キヤラが好き。でも流石に、ゼンガー親分チツクな改造は出来ない。残念。斬艦刀もちょっと無理そう。残念。

結局、クーデレなんですか、クーデレなんですか、って考えると、

結論は刀です。胸は大きいほう。でも、そんなことより刀。

お気に入りなのに、出番が来るのが大分遅い。真打は遅れて、というやつだろうか。出番が来たね、よし刀だ。

出てきたと思ったらヤンデレっぽくなってた。これも刀 パワーか。

以下、完全に蛇足

作者はツンデレ、ヤンデレよりも刀キャラの方が好きです。でも素直クールはもつと好き。

ファン
リンイン
鳳 鈴音

中華人民共和国の国家代表候補。

ツインテ小柄ツンデレらしい。昔一夏にした約束は、嫁になって毎日一夏に酢豚を作ってあげるといふもの。一夏曰くセカンド幼馴染。

コメディ担当。

専用機は「甲竜」シエンロン

下にガンダムをつけて呼んではいけない。

????? 「貴様らは正しいのか！ 正しいのかと聞いている！」

プロローグ 虚空より来る

夜。どことも知れない山中、漆黒の闇の中、赤い2つの光が灯った。

それとほぼ同時に、巨大な何かが、その場に突如として現れる。夜の闇に覆われて、その姿をうかがい知る事は出来ない。

「……転移完了。各部異常なし。情報ネットワーク検索開始」

クオヴレー・ゴードンは、安堵していた。

別世界への転移は、いつも危険が伴う。

また、転移した先でいきなり襲撃される、という経験もあった。そういった意味で、今回はとても幸運だといえる。

彼は今、転移してきた世界に、情報ネットワークシステムがあるかどうか、調べている。

発達した文明は、いずれも高速化した情報ネットワークをもち、それだけでも、文明の度合いが分かるのだ。

勿論、存在すれば即座に接続し、大まかな情報を得ることが出来る。

「情報ネットワークの存在確認。未登録データ検索開始」

更新されるデータがあまり多くない。

この世界のデータは、彼が初めにいた地球と、近しいものがあるようだ。

その中で、1つ彼の目を引く項目があった。

インフィニティストラトス。通称IS。

この世界における機動兵器のようなものであり、その使用は制限されている。

特殊な技術が導入されているらしく、世界中でわずか467機が存在するのみとなっている。

開発者は現在行方不明。

パワードスーツのようで、人間サイズだというのが1つの特徴だが、それ以上の特徴は女性しか扱う事ができない、という点にある。汎用性を求める兵器として、なぜこのような仕様なのか不明だが、このこともあってこの世界では女性の地位が高いとのことである。

「今得られる情報はこの程度か」

クオヴレーはそう呟くと、機体をISに擬態させ、麓に下りていった。

麓までいけば、後は歩いていこう、そう考えていたのだ。

そして、彼がその機体を虚空に帰そうとした、まさにその時。

何者かに襲撃を受けた。

クオヴレーは舌打ちする。アストラナガンを見られてしまった事に。

敵は3機。その内リーダー格と思われる1人が呼びかけてくる。

「これは一体何だ、答えなさい！」

事を荒立てたくはなかったが、仕方がない。

彼は、ISとなった自らの半身で、戦闘を開始した。

「いくぞ、アストラナガン」

襲撃者は、驚いているようだ。なにしろ、見るからに専用機といっただけでたちのISが、そこら辺をウロついていたのだから。

また、声が男性のものだった事にも驚いていると見て間違いない。もともとクオヴレーは、彼女達のためらいを待つほど、優しくはなかった。

「ガン・スレイヴ、ロックオフ」

今はISとなったアストラナガンの背から解き放たれた使い魔は、襲撃者をあつという間に2機を捕捉し、攻撃を加えた。

次の瞬間にはアストラナガンは、黒い翼から緑色のフレアを撒き散らし、残りの1機に向かう。

その手には、クオヴレーにとって使い慣れた近接兵装、Z・Oサイズ。

「速い!？」

「切り裂け」

彼の知識には、すでにISのエネルギーフィールドは存在していた。

しかし、死神の鎌としか形容できないZ・Oサイズは、いともたやすくフィールドを切り裂いた。

ただ、生身の人間が見えているため、その部分には攻撃は加えず、フィールドのみを切り裂く。

「そして打ち砕け!」

動揺しているリーダー格の様子など気にもとめず、鎌の柄の部分

を2つに分け、散弾を発射する。

一撃ごとに、ISの部分だけが正確に破壊されていく様子だけでも、その戦闘センスをうかがい知れる。

「こんな、馬鹿なことって……3機のISが、一気に、機能停止……?」

しかもご丁寧に、操縦者には傷ひとつつけられてなかった。彼女達は、圧倒的な実力差を見せ付けられたのだ。

クオヴレーはそんな自失した彼女達に、淡々と告げた。

「ここで見たことは、全て忘れる。俺も無駄な殺生はしたくない」

彼女達は、その言葉を受け入れるしかなかった。

無論、完敗した相手に生かされた、という事実を報告する、というのもプライドにかかわる問題だったのもあるはずである。

ともあれ、クオヴレーは、彼女達を置いて、どこかへと去っていった。

そよ風にその特徴的な銀髪をなでられながら。

第1話 2人だけの男

クオヴレーが初めてISと戦闘してから数日後。

彼は現在、日本にいた。しかも、高校入試の会場である。

目的は、IS学園に転入することだった。そのためには、ISを動かす必要がある。

この世界では、規模の大きな受験会場などは、警護用にISがおかれているらしく、彼はそれを探していた。

そして、警護用に置いてあったISを発見する。

第2世代型量産機『打鉄』。日本では、最も一般的なISである。クオヴレーは、機体に歩み寄ると、デイス・レヴの力を使って、ISを無理矢理、動かした。

当然、騒ぎになる。男性がISを動かした。この瞬間、彼の行き先はIS学園へと変わる。彼の目論見どおり。

ちなみに、クオヴレーがIS学園転入を目指した理由は、数多くのIS関係者が集まる場所ならば、ISに関する情報も入ってくるだろう、という予想からだった。

ISはこの世界の最新技術の結晶であり、平行世界への扉には、ISがかかわってくるはずだ、と予想したのである。

一方、別の会場でも、同じ騒ぎを起こしていた人間がいた。

織斑一夏。IS版オリンピック、或いはガンダムファイトと呼べるモンド・グロツソの初代覇者、織斑千冬の実の弟、その人である。

2人は、この世界の歴史上初めて、ISを動かした男性になった。

マスコミでも大々的にこのニュースは取り上げられたが、特に一夏に対しては、過熱的な報道がしばらく続いた。

初代ブリュンヒルデの実弟、男性ながらISを動かす。

どのマスコミもそのような見出しで、一体どういう理由で動いたのか、などと憶測記事が書き立てられた。

週刊誌には、日々の一挙手一投足が掲載され、テレビはこぞってその姿を映そうと後を付けねらっていたほどだ。

一方のクオヴレーについての報道も、一夏からやや遅れて、加熱していった。

なにしろこちらは、謎だらけだ。経歴を追うところから始まった。生まれはどこか。どのように育ったのか。どれもこれも謎ばかりで、国籍がアメリカ国籍、という程度の情報しか入らないのが実情だった。

これにはマスコミも困り果てた。特殊部隊の経歴のように、まるで存在しないのだから。

もっとも、テレビにおいてはこの2人を追い掛け回す事に、意味はあった。

なにしろ、2人とも容姿が整っている。モデルやタレントに後れを取らない容姿といってもいい。

いくつものテレビ局のレポーターが、彼らを囲んでマイクを向ける事に力を注いだ。

しかし、その内、彼らの姿が、テレビに映らなくなっていった。

最初に映らなくなったのは、クオヴレー。彼を取り囲もうとする、気分が悪くなるレポーターが多かった。

曰く、背筋に寒気が走る、恐怖を感じる。拳句、彼を映そうとするとノイズが入る。

恐ろしくなった彼らは、彼の姿を追う事を諦めた。もっとも、今度は霊能力者がテレビで台頭したが。

織斑家の方は、その後だった。

連日報道陣に自宅を囲まれ、一夏は家を出るに出られず、姉の干渉は、家に帰る事ができずにいたのだ。

特に、クオヴレーへの関心を失ってからは、道路が封鎖されている、といったも過言ではないほどだった。

そんな折、織斑家の前に1人の青年が現れた。銀髪に緑の瞳。報道陣などまるで意に介さないような落ち着き。

その姿に驚いたのは、報道陣だった。カメラを向けるとのろわれろという都市伝説まで、まことしやかに囁かれるような人物が姿を見せたからである。

クオヴレー・ゴードン。アメリカ国籍となっているこの青年が、なぜここにいるのかと、彼らは困惑した。

「この中で彼を窒息させるのがお前達の仕事なのか」

クオヴレーは、報道陣にそう問いかけた。

黙りこくる報道陣。だが、その中の一部から、報道の自由だ、とお決まりの文句を出される。

「報道の自由、か。だがそれは、1人の学生の自由を奪う理由にはならないはずだが」

至極まっとうな言葉である。

そして彼は、頭を垂れている報道陣にアストラナガンの力、正確に言えば、デイス・レヴの力を使う。

地の底から沸きあがる呻き声。それは、生者を求める亡者の声だった。

恐怖に駆られる報道陣。死神の声は、餌にたかる鳥を追い払って見せた。

「これでよし、か」

彼は織斑家に背を向け、歩き出した。

当然だが、彼は織斑家に対して、何の関わりもない。

それでも彼は連日の報道をチェックしている中で、自分以外の男性がISを動かした事を知った。

その名は、織斑一夏。モンド・グロツソ初代覇者の実弟。

もっとも、彼にとっては、IS・ザ・ISの称号を得た女性の弟、と考えた方が理解しやすい事柄だったが。

ともかく、連日殺到する報道陣に、家も出られない状態となっている事を知ったクオヴレーは、彼をこの圧力から解放しよう、と考えた。

すでにマスコミの間では、彼の名は不吉なものとなっていたのを利用する事にしたのだ。

「待つて、待つて！」

歩いていたクオヴレーは、声のしたほうを振り向く。

それが、織斑一夏だと、彼にはわかった。いや、今彼の顔を知らない人はほとんどいないはずだ。

これまでの報道から、何の面識もなくとも、織斑一夏だと、そう分かっただけの話だった。

恐るべきは、平凡な一学生を、興味本位で顔まで映すマスコミだろうか。

「君が織斑一夏か。災難だったな」

「助けてくれたんだろ？　ありがとう。ええと、久保レさん？」

一夏の名前もそうだが、クオヴレーの顔と名前も、世間に知れ渡っていた。勿論、同じ理屈である。

「クオヴレーだ。だが、俺の名前は呼びづらいらしいからな、ゴードンでいい」

「く、久保、久保、駄目だ、舌が回らない。じゃあ、ゴードンさん。なんかお礼させてくれよ。助けられっぱなしってのは、あまり好きじゃないんだ」

「俺は何もしていない。ここの前に来ただけだ。どうやら、俺はマスコミから嫌われているらしいな」

ふふ、と笑うクオヴレー。カメラを回せば霊やら霊やら霊やらが映りこむ相手を撮影しよう、という物好きはあまりいない。

確かに、通っただけで逃げ出したくはなるだろう。拳句、今回は謎の唸り声である。

クオヴレー・ゴードン。彼は間違いなく、霊能力者に支払われるギヤラを増やさせているに違いない。

「そついわずに、家が上がっていつてくれよ。俺、なんか作るからさ」

「あまりかたくなに人の厚意を断るのもよくない、と教えられたな。そうさせてもらおう」

そういうと、クオヴレーは、織斑家の中へと入っていった。

織斑家の中は、日本の一般的な民家、といった感じだった。住んでいる人間が綺麗好きなのか、家の中は綺麗に片付いている。

一夏はクオヴレーをリビングに通し、席につけて、それから聞いた。

「早速だけどさ、何か食べたいものとかあるか？」

「そつだな、幽霊、といこうか」

「は？」

「ふふ、冗談だ」

クオヴレーは笑みを浮かべて言葉を打ち消すが、実際のところ、デイス・レヴは見方によつては、霊を食っている代物である。

つまり、冗談にはなっていない。もつとも、そんなことは知らない一夏は「そんな冗談やめてく霊」と、ふざけた様子で言った。

「やめてくれい？ ああ、霊とくれいをかけたのか」

「そんな真面目に考え込まなくてもいいよ。そうそう、幽霊が周りにいるって噂あるけど、ホント？」

「本当かどうかは、その内分かる」

「冗談とも本気とも取れない口調で、クオヴレーはいった。表情からも、真実かどうかは伺えない。」

「とにかく、なんか食べたいものとかあるか？」

「その話だったな。ジュースでももらおうか」

「そうか。じゃ、後はお菓子を何か探してくる」

そう言つて一夏は、席を立つて飲み物とお菓子を探しにいった。

「千冬姉にお菓子ほとんどもってかれてる……参ったなあ」

一夏は、困惑した様子で、菓子を探し回り、ようやく見つけた。

「これだけか。あわない組み合わせだな」

一夏が再びクオヴレーの前に姿を現した時には、持ってきたプレートの上ののっているのは、コップとオレンジジュース、それにせんべいだった。

「おかしな組み合わせだな」

クオヴレーが、オレンジジュースとせんべいという組み合わせを見て呟く。

それを聞いて取った一夏は、「オレンジジュースと組み合わせるには、おかしなお菓子、だろ」とシャレを言う。

「それにしても、ジュースとせんべいがおかしな組み合わせだってよく分かったな。アメリカ国籍なんだろう？」

「知り合いには日本人も多いのでな。こういう場合は緑茶だと聞いている」

なんだ、よく分かってるんだな、と意外に思う一夏。

銀髪に緑の瞳。見るからに欧米系の容姿をしたクオヴレーが、せんべいには緑茶、といったのだから無理もない。

「ところで、君はなんで日本の高校受けようと思ったんだ？」

クオヴレーがオレンジジュースを一口飲んだところで、一夏が聞いた。

彼は外見的に同世代かつ、自分と同じく世界で初めてISを動かした男性となったクオヴレーに興味を抱いたらしい。

「昔から日本は良く知っていてな。去年こちらに住むことにして、こちらの高校をうけようとおもったんだ」

そうしたら、今はこの通りだ、と自嘲気味に笑うクオヴレー。

「お互い、大変だよな。普通に高校にいこうとしたらこんなことになっちまって」

ISを動かしてしまった事から、友人などから離れて、全寮制のIS学園に転入させられるようになったことだけではない。

受験の日の直後から、マスコミに追い掛け回された事もこんな事に入る。

もつともクオヴレーは狙ってやった事なので、内心はどうとも思っていない。

ただ、一般人である一夏がマスコミに追いまわされるなど、大変な事ではあるだろう、と思いやるだけだった。

「なつてしまった事は仕方ない。これからどうするか、だ」

「考えてみれば、IS学園って、女しかないんだよな」

「俺を除けばな」

「ああ、進学してからも、よろしく頼むぜ」

そういつて握手を求める一夏。応じるクオヴレー！。

一夏の顔には、いくらか安堵の表情があった。無論、同級生に男子がいた、という安堵感である。

1人だけで放り込まれるよりは、まだ仲間が1人でもいたほうが心強い。

「そういえば、千冬姉がIS学園で教師やってるんだよな……まさか、担任とかにはならないよな」

「千冬姉。IS・ザ・ISの織斑千冬の事か。どういう人間なんだ？」

「厳しい姉だけど、家だとちょっとズボラかな。後、戦闘力は高い。だから怒らせるなよ」

最後の部分に、力を込める一夏。

その必死すぎる様子に、クオヴレーも流石にやや気圧される。

「そうか、覚えておこう。しかし、戦闘力が高い、という事は、ISを使わずにビルを飛び越えられるとか、生身の方が強いとか、そういう人か？」

「おい、一体今まで何を見てきたんだよ」

素直に驚いた様子で、違うのか、と尋ねるクオヴレー。

「そこまで行くと人間じゃないだろ」

「しかし、モンド・グロツソだったか、ISの世界大会の優勝者なのだろう？ その手の競技の優勝者は、そんなものだと思っていたのだが」

「なあ、ゴードン。お前、一体どこで育ったんだ？」

「アメリカだが」

呆れる一夏。彼の頭には、もしかしたらこの世界の人間じゃないんじゃないか、との考えもよぎったが、流石に馬鹿らしいので口には出なかった。

「まあいいや。それより、絶対に千冬姉の前では、生身でビル飛び越えられますか、とか聞くなよ」

「なぜだ」

「お前の命のためだ」

身を乗り出し、何度もそう繰り返す一夏。

クオヴレーはその様子に、分かった、と答えた。

その後も、雑談をして一夏とクオヴレーは過ごす。

どのくらいか時間が過ぎた後、クオヴレーは自分の時計を見て、席を立つ。

「邪魔したな。では、学園でまた会おう」

クオヴレーは一夏にそう告げると、織斑家を後にした。

この後、彼ら2人を、カメラに収めようとする事はなくなった。

一部マスコミが、クオヴレーと一夏に交友関係があったか調べようとしたが、何も得られなかった程度しか、この後のマスコミは語ることはない。

それから数週間後。クオヴレーと一夏は、今度はIS学園で再開した。

IS学園入学のためには、教官と模擬戦を行い、ある程度の結果を残せなければいけないのだといわれたのだ。

クオヴレーと一夏は、お互いの健闘を願いあって、それぞれ模擬戦を行った。

そして、2人は無事（もつとも、一夏にとってはこれでよかったのか分からないが）結果を残し、正式に入学が決まったのだ。

模擬戦から更に数日後に、彼らは入学式を迎えた。

クオヴレーと一夏は、2人で談笑しながら学園についた。

全寮制、ということもあり、彼らの生活の場にもなるのだ。

「なあ、ゴードン。同じクラスだといいな」

「そのくらいは配慮されるだろう」

学校側からしても、わざわざ別のクラスに2人しかいない男子生徒を分けるより、1つのクラスにまとめた方が、よほど管理しやすい。

他にも、食事はどうなのだろう、とかトイレはあるのか、などと話しながら歩いていると、体育館に近いところまでできていた。

すると、わずか2人しかいない男子生徒を一目見ようと集まった

生徒（当然全員女性である）が、塊になって彼らを待ち構えており、クオヴレー達はあつという間に包囲された。

「君たちがIS動かした男の子かー、すごいねー！」
「出来る男は、顔もかっこいいね、食べちゃいたい」

などなど、口々に感想を言うわ、質問をするわで、全く身動きの取れない状態になってしまった。

あまりのしつこさに、クオヴレーがアストラナガンを叫ばせるか、と思い立ったその時、鋭い声が飛んできた。

「今から入学式だ。上級生がこんなところで油を売ってどうする！ 彼らとて、性別を除けば新入生にすぎん。歓迎したければ後でやれ！」

まさしく鶴の一声だったらしく、その言葉が終わるか終わらないかのうちに、取り囲んでいた生徒は綺麗にいなくなった。

クオヴレーが隣の一夏を見ると、どうやら様子がおかしい。そして、彼はそのまま声のした方に視線を移し、納得した。

モンド・グロツソ優勝者として撮影されていた顔写真の女性。すなわち、織斑一夏の姉、織斑千冬だった。

「千、千冬姉。助かったよ」

「それにしても、妙におびえた表情だな、一夏」
「いいえ、滅相もございません」

急に言葉が改まる一夏。成る程、心底恐れているようだ、とクオヴレーは判断する。

すると、今度は千冬はクオヴレーのほうを向き、話し始めた。

「君がクオヴレー・ゴードンか」

「ええ」

「弟を助けてくれたようだ、礼を言う」

いつぞやのマスコミの事が、と思い当たるクオヴレー。しかし、彼がしたことは、報道陣の前に姿を見せた事だけである。

「俺は何もしていませんよ。ただ、俺がマスコミに嫌われていただけですよ」

一夏からも、そのように言われたと聞いていた千冬は、そこにはそれ以上立ち入らなかつた。

代わりに「弟のこの学園での唯一の男友達だ。仲良くしてやってくれ」とクオヴレーに頼み、千冬は去っていった。

その後姿を見ながら、厳格ではあるが、やはり弟は心配なようだ、とクオヴレーはそんな感想を抱いた。

入学式は、どこでもそうなっているように、クラス別になっている。特殊な環境であるIS学園も、それは例外ではない。

一夏とクオヴレーが、共にクラス表を見ると、彼らは同じ組1年1組に分けられていた。

予想はしていたが、やはり、それが確認できたとなると安心できるのだろう。

ホツとした表情を一夏は浮かべて、良かった、と呟き、それから式場に入った。

千冬の指導もあつたのだろう。入学式は、特に滞りなく進んだ。流石にどの生徒も、自ら進んで千冬の鉄拳制裁を受けようなどとは考えていない。

入学式が終わると、そのまま新入生はクラス毎に自分の教室に向かう。

彼ら1年1組は、山田麻耶、と名乗る女性教員に連れられ、これから自分達を使うことになる教室に向かっていった。

第1話 2人だけの男（後書き）

ISものなのに、ヒロインキャラの登場が遅い……。

今回のメインは一夏。男なんてどうでもいい、なんていわないでください。女子の群れに男子1人だけ放り込まれるのと、2人で放り込まれるのでは、本編でも触れましたが、心強さが大分違います。

そしてマスコミのターンでもありました。

実際、連日自重無しの報道が繰り返られそうですよね。

というわけで、入学試験でISを動かした部分は簡素にして、その分マスコミにまわしました。なんかおかしい？ 筆者は常にこういうスタンスですのであしからず。

一応、次回の予告をしておきますと、クオヴレーVSオルコットになります。

第2話 強者の条件

「私は副担任の山田麻耶です。これからよろしくね」

1組の生徒達を案内した山田という教員は、彼らの副担任だった。生徒の1人が、担任の先生は、と訊ねられると、素晴らしい人だから楽しみにしてね、と麻耶は返す。

一夏は、それを聞いて安心していた。お世辞にも、自分の姉は人間的に素晴らしいと言いがたい。

鬼か羅刹のような恐ろしさばかりが目立つ。彼が安心しきっていると、噂の担任がクラスに入ってきた。

その顔を見るや、一夏は冷や汗をかき、思わず、「げ」と呻きを漏らしてしまった。

噂の”素晴らしい人”とは、自分の姉だった。

「織斑。なんだ、その嫌そうな顔は」

「や、やあ、千冬姉。担任、だったんだ」

「織斑先生、だ。公私の区別もつかんのか、お前は」

恐怖を感じて、やっとのことで「わかりました、織斑先生」と返事をする一夏。

彼にとってはわからないことだが、そんな姉でも、どうやらISを扱う女性にとっては憧れの的らしい。

さっきのやり取りを見てなお、賞賛やら感動の言葉の嵐が巻き起こる。怖いもの知らずとはまさにこのことだ、と一夏は考えた。

クオヴレーだけは、最初から落ち着いているようだった。

「静かにしろ。これ以降、私の授業中にムダ口を叩くような奴は、黙らせるからそのつもりで」

よりもよつて、クラスへの最初の言葉がそれかよ、とツツコミを入れたくなる一夏。

入れたら入れたで、命が危ういので、喉まで来た言葉を胸に押し込む。

だが、これを見ても、憧れの様子を見せる女子達。

本当に怖いもの知らずだ、と、そう思っていると、自分の頭に出席簿が叩きつけられた。

「い、つてえ、いきなりひどいじゃないか、千冬姉」

再び、出席簿が一夏の頭に叩きつけられる。一夏は、涙目になり、頭をさすりながら、担任を見上げ「す、すいませんでした、織斑先生」と謝罪する。

その一夏の言葉に、千冬は「一度目は見逃してやったのだからな、学習しないお前が悪い」と冷徹に言い渡し、ついでクラスを見渡す。

「皆も聞いておけ、ムダ口を叩くな、と言ったが、かといって黙っていればやりすごせるわけでもないぞ。やる気がないとみたらたつき出す」

基本事項を連絡しおえたところで、出席簿を見る千冬。

出席簿に目を通した後、彼女は言った。

「今日は初日だからな。出席確認代わりに、自己紹介をしてもらおう」

その言葉に、次々と起立しては自己紹介をする女子達。

やがて、一夏の番が回ってきた。彼も同じように、特に角の立たないような自己紹介をする。

そしてクオヴレーの番がやってくる。

クオヴレーは、起立すると「クオヴレー・ゴードン。アメリカから来た。何の因果か、その織斑と同じく、ISを動かせるようだ」と、ここまではよかったのだが、「特技は編み物だ。よろしく」と続けてしめた。

この世界でも、男性の編み物などは一般化していない。クオヴレーとしては、自分が若干近寄りがたい雰囲気を持っていることを自覚しているため、家庭的な特技（実際に特技である）を強調してみたのだが、この時点では、その効果は期待できないものになってしまった。

とはいえ、それでも笑うものはいない。笑い声など出せば、先ほどの千冬の宣言通り、黙らされてしまうだろうと思っっているからだ。結局、自己紹介にありがちな、自己紹介への軽いリアクションなど皆無、という静かな雰囲気のまま、自己紹介は終わった。

「さて、次は、クラス委員を決めねばならん。誰か、立候補したいやつはいるか？」

千冬がクラスを見渡してそう訊ねると、1人の生徒の手があがった。

クオヴレーでもなければ一夏でもない。要するに、女子である。

その女子は、髪はブロンドで瞳はブルー。所謂、金髪碧眼だった。

「私、セシリア・オルコットは、母国ユナイテッド・キングダム
の国家代表候補生でもありますし、当然、立候補させていただきます
わ」

その言葉からは、プライドの高さが伺えた。また、自分は凡人とは違う、という強い自尊の響きもあった。

だが、ここに1人、国家代表候補生がなんなのか、分からない人間がいた。

今まで、ISにこれまで全く関わらなかった、織斑一夏である。実はクオヴレーも、その単語自体は聞いた事が無かったが、おおよその察しはついていたので、黙っていた。彼は、国家代表候補生も調べようと思えば調べられたのだが、必要なのはISに関する技術面の情報や、ISに関わる代表的な人物の情報だったので、衛星的な情報は切り捨てていたのである。

一夏の方は、国家代表候補生とは何か、と言った。セシリアは、最初不機嫌な表情を見せ、続けてその無知を笑うかのように、彼に語った。

「国家代表候補生とは、ISの国家代表になる資格をもったもの。この資格を持つものはIS所持者の中でも、一握りですの。つまりエリート中のエリートということですよ」

セシリアは、参ったか、とばかりに胸を張るが、クオヴレーも一夏も、特にそのことがどうとは思わなかった。

一夏は、姉が元国家代表どころか、モンド・グロツソの覇者であるし、クオヴレーは、そもそも、それ以上の肩書きの実力者などごまんと見てきた。

「お前は、候補どまりだろうな」

クオヴレーのその一言が、セシリアに届く。当然、セシリアは怒った。代表候補生になるまでがいかに変な力説しはじめのセシリア。それをクオヴレーは鼻で笑う。そして彼女に、クオヴレーは言った。君はまるで候補生で満足しているようだ、と。そんなことはない、と否定し、自分も代表を目指している、と主張するセシリア。

「真に代表になれるような人間は、候補生では何も勝ち取っていない

いと考えるはずだ」

「わ、私がどのようにして代表候補の座を勝ち取ったかも知らずに、よくもいえますわね！」

「お前がどう苦勞してきたか、俺には分からない。だが、俺の知る、目標にたどり着いたものは、候補段階ではそんな様子は見せなかつたぞ」

すると、そのやり取りを黙って見ていた千冬が急に口を開いた。

「一夏は、雷でも落とすのだろうか、と考えていると、他に立候補者がいないなら、2人でその座を賭けて戦ってもらおう、と言います。」

更に千冬は続ける。

「お互い言う事があるようだ。だが、これ以上騒がれるのは面倒だ、ISでの模擬戦を行い、勝った方の主張が正しい事にしろ。勝てば官軍だ、以上」

お互い、その提案を受け入れる。クオヴレーはセシリアの「あなたには負けませんわよ！」という言葉を見無視して、教室の外に出た。すると、後ろから千冬に声をかけられる。

「なんでしようか、織斑先生」

「ゴードン。お前に渡すものがある」

そういつて連れられていった先には、1機の『打鉄』が置いてあった。

「高校入試の日、お前が動かした『打鉄』だ」

「それがなぜここに？」

千冬が語るところによると、あの日、デイス・レヴでコアを強制的に起動させた日から、この『打鉄』は曰く付のものになったらしい。

起動させようとすると、声が聞こえるとか、霊が見えるとか、寒気を感じるとか、ともかく乗りたがる人間がいないので、このIS学園に送られてきた、とのことだった。

お手軽心霊スポットのようになってしまった『打鉄』を見て、デイス・レヴの影響が出すぎたか、とそう考えたクオヴレーだが、そんな様子はおくびにも出さず、千冬に聞く。

「つまり、俺はこれを使えと」

「察しがいいな。そういうことだ」

そして千冬は、クオヴレーに囁く。

「恐らく専用機を出してくるだろうが、お前は大丈夫だろう。戦いに慣れている感じがする」と。

実際その通りで、彼は、この学園の誰よりも 千冬よりも実践を経験した事がある人間だった。

彼はその千冬の洞察力に内心では舌を巻きつつも、「ただの買いかぶりすぎですよ」と、千冬に告げると、闘技場に向かって歩き出す。

クオヴレーの競技場への到着を、セシリアは待っていたようで、クオヴレーはセシリアから、遅い、となじられた。

すでに、彼女はISも装着しているので、クオヴレーも、自身のISを装着する。

セシリアは、専用機『ブルー・ティアーズ』。対してクオヴレーは、量産機である『打鉄』。

機体性能としては、歴然の差である。

それでもクオヴレーは、落ち着き払っている。微塵の焦りもない。逆にセシリアのほうが、落ち着かない様子を見せている。

「あの、やはり、今からでも、私も機体を同じ条件にしてさしあげましょうか？」

自分だけ専用機を使うのか、という戸惑いが改めて含まれているが、それ以上に、同じ機体でも負けはしないだろう、という自信の現れでもある。

さきほど、挑発に乗って怒りのあまり、専用機を駆り出してきたことを少々後悔しているらしい。

だが、クオヴレーの態度は変わらなかった。

「機体まで含めて実力だ。全力で向かってくるんだな」

涼しい顔でそうのたまうクオヴレー。

セシリアは顔を赤くして怒りを示し「その不遜、私が打ち砕いてさしあげますわ！」と宣言した。

審判役の千冬に、開始の合図を、と催促する。

千冬が一応、クオヴレーに始めていいか、と聞くと、問題ないと答えが返ってきた。

待っていたのは、見物に来た生徒達も一緒に、口々に何か好き勝手言っている。ただ、その多くは、セシリアを応援する言葉だった。

「では、開始！」

先に動いたのはセシリア。

青く長大な砲身のビームガンを、クオヴレーの打鉄に向けて発射する。

距離があることもあり、クオヴレーは全て回避する。回避しつつ、射撃戦用の機体が、と見抜く。

そうでもなければ、あのように取り回しのしづらい射撃武器が最初から装備されているのは珍しい。

一方セシリアは、一向にビームが当たらない事に業を煮やし、背部から秘密兵器、ブルー・ティアーズを射出した。

「お行きなさい！ ブルー・ティアーズ！」

「……！ ファンネルか」

それは、クオヴレーから見れば、ファンネル以外の何者でもない。そのため、一瞬ニュータイプか、と焦ったが、彼らの扱うそれと比べると、遥かに回避が易しいものだった。

（ビームライフルを使用しないことを考えても、あれの制御だけで精一杯か）

「ふふふ、これを見たからには、私の勝ちが決まったようなものですわ！ 観念なさい」

「生憎だが、この手のものは見慣れているんでな」

そういうと、武装の中からライフルを選択するクオヴレー。ライフルを手取るや否や、ビームを発射してくる1基をまず落した。

「そんな!？」

「俺が見てきたオールレンジ攻撃の中で、一番甘い攻撃だな」

「な、なんですって！」

「この程度で誇るようなら、戦場では死ぬしかあるまい」

その言葉に、怒りを覚えるセシリア。

そして、ちぐはぐになる”ファンネルもどき”の動き。

そう、制御に集中しなければ、この武装はまともに動かせないのだ。

「精神的にもその程度か。期待はずれだ」

クオヴレーはそう告げると、『打鉄』をセシリアに突進させる。

接近を防ごうと、ビームを乱射するセシリア。しかし、焦っているのもあって当たらない。

「よく見て狙え」などといえる余裕すらクオヴレーにはあつたくらいである。

そして、白兵戦の間合いに飛び込む。

その手には、武装選択で呼び出した刀があつた。

だが、斬りつけるまでもなく、セシリア機は機能を停止した。

エネルギー切れである。ISは、何をするにもエネルギーが必要なのだが、そのエネルギーが切れると、機能を停止する。

こうなれば、このような模擬戦などでは、その時点で負けとなる。よって、審判役の千冬も、この状態を見て「そこまでだ、勝者、クオヴレー・ゴードン！」と、高らかに宣告した。

この結果に、セシリアは膝をつき、呆然とした表情を浮かべた。

それは、埋められないほどの技量差を見せ付けられた事によるものだ。

「私……私が、『ブルー・ティアーズ』を使った私が、量産機の、しかも、男……に」

クオヴレーは、あえて、セシリアに言葉をかけなかった。彼女が事態を受け入れるのに、もう少し時間が必要だと判断したのだ。

すぐにかけてよって慰めの言葉では、却って彼女を傷つける事になるだろう、と彼は察していた。

言葉にもタイミングがある、という事は、彼はこれまでの経験で良く分かるようになっていた。まして、セシリアの如くプライドの高い人間ならなおさらだ。それでも、彼女は精神面を改善していけば、トップレベルに上り詰める事が出来るはずだ、とクオヴレーは思っていた。彼女には、素質がある。

かつて、こういったものがある。

「才能ある若手に必要なのは、挫折を経験させる事だ。挫折は、才能を伸ばす最高の良薬となる」

エリートコースを歩んできたセシリアにとっては、まさしく最初の挫折のほずで、これ乗り越えられなければ、候補どまりになってしまうのだ。クオヴレーは、落ち着きを取り戻したら、いくらか言葉をかけよう、と決めてその場を後にする。

教室に戻ろうとしたクオヴレーに、一夏が駆け寄ってくる。

「凄かったな、ゴードン。ISに詳しいやつらでも驚いてたぞ」

「大したことではない。彼女の攻撃はシンプルすぎた」

そして、あのビット兵器とビームライフルを組み合わせた立体攻

撃をしかけられたら、俺も困っていただろう、と続けたのを見て一夏は、こういう時くらいは誇ってもいいんだぞ、といった。

一夏としては、普段から女性（特に実姉）に優越されていたこともあり、その女性を不利な条件ながら実力で圧倒したクオヴレーを見て、自分のことのように嬉しがったのである。

当のクオヴレーは、なんでもないような顔をして、教室へと戻っていったが。

この後クオヴレーは、1年1組のクラス代表に任命された。そして、そのサポートとして一夏が指名された。

すると、副代表として、もう1人クオヴレーのサポートをしたい、という女子が現れた。

凛とした瞳に黒色の長いポニーテール。そして付け根には緑のリボン。それは、一夏の良く知る人物だった。

クオヴレーにとっても、その姓は明確に脳に記録されていた。いや、この場でその姓を知らぬものの方がいないだろう。

篠ノ之箒。ISの母である若年の天才科学者、篠ノ之束の妹であり、一夏にとっては幼馴染の少女であった。

第2話 強者の条件（後書き）

まずは、見事なかませになったオルコットさんお疲れ様です。

作者は、クオヴレーとオルコットの技量は、現時点では天と地ほどの差があると考えています。ちなみに、しばらくは『打鉄』がクオヴレーの機体になりますので、ご了承ください。どうもクオヴレーと千冬の実感が際立っているようにしか見えない。

一夏ハーレムと冒頭にかきましたが、そもそもハーレム的な何かができるのかさえ怪しくなってきた今日この頃。

元々ハーレム系作者じゃないんです（必死）

ちなみに、関係ないですが終盤の格言はヨハン・クライフのものです。

流石御大、いい事いうね。

今回は本格的に篤さんを扱うことになりそうです。

第3話 得るもの、得られたもの

クラス担任である千冬は、起立した少女 篠ノ之箒の顔を、しばしの間見た。

千冬にとつても当然、箒は面識のある人間だった。少しの間、何も言わず箒の顔を見続けていた千冬は、やがて思案がまとまったらしく、口を開く。

「篠ノ之ならば、織斑との面識もある。ある程度、スムーズに事を運べるだろう。よろしい」

箒は、一瞬、ほんの一瞬だけ嬉しそうな表情を見せるも、すぐにそれまで浮かべていた仏頂面に戻り、「ありがとうございます、織斑先生」と千冬に礼を告げた。

事務的なやり取りではあったが、両者から、お互い相手を良く知るもの同士の、ある種の信頼感のようなものが見て取れるものだった。

クオヴレーは一夏と面識がある、との言葉も含め、この2人に、なにかしら個人的な交友があるのだろうか、と察しはついたが、それは、プライベートなことであり、特別に立ち入るつもりはなかった。

それよりも、クオヴレーの頭にあったのは、今は自分の席でどこか遠くを見ているセシリアがどうなるかだった。

厳しいようだが、この程度の敗戦を受け入れられないようなら、セシリアにはもう、この先はない、と断言できる。

クオヴレーは、セシリアが自ら立ち直るまで、慰めも励ましもしないつもりだった。これは、セシリアが乗り越えるべき壁なのだ。

「ではクオヴレーがクラス代表。その補佐には織斑と篠ノ之。異論はないな？」

千冬が、クラスを見渡しそう聞く。クラスからは、もう異論は出なかった。

その様子を見て、3人を前に招く千冬。

「これから1年、君たちがこのクラスの代表だ。クラスの代表としての自覚をもって行動するように。また、そのほかの諸君も、彼らに任せつきりにならず、それぞれ自覚を持って」

この日の放課後、クオヴレーは質問責めにあっていた。

女子に囲まれ、「専用機に勝てると思っていたの？」や「IS初めてなんでしょ？」などなど、矢継ぎ早に質問が繰り返される。

質問の多くが、彼の技量についてであり、昼の模擬戦についてであった。

もっともクオヴレーは、これまでも何度か転入生扱いで高校に在籍したことがあり、このように囲まれたりするのは慣れていた。

ついでにいえば、彼はその端麗な容姿のため、転入した先で女子に囲まれるなどしょっちゅうであったし、最初に自我を形成した場所でも女性の数も多かったため、女性が多いからといって、別段何か引け目を感じるような性格でもない。

そのため、要領よく質問に逐一答えていき、見た目の人数ほどには時間をかけずに答え終わった。

そして、一通り質問に答えたと見るや、クオヴレーは「もういいか」と聞き、席を立てて一夏を探しに行った。

一夏の姿を探すと、どこにもない。クオヴレーは、ここに来てまだ友人もいないはずだが、と首を傾げ、1つの可能性を思い立った。織斑千冬と篠ノ之箒が面識があった感じだったので、一夏とも面識

があるに違いない、と察しをつけたのである。

今日のところは、ゆっくりと休むか、と思い立つクオヴレー。寮の部屋番号を確認し、自分の部屋に入る。

個室は2人で共有する相部屋だが、中々の快適さだった。

「そこらの宿泊施設より、充実しているな」と、そんな感想を抱くクオヴレー。

あまりすることもないので、彼は、ISについての情報をインターネットで検索した。

しかし、特に彼の目を引くような記事もない。次は、「篠ノ之束」で検索を開始する。

やはり、特に目新しいものはない。収穫は無しだな、とクオヴレーが切り上げようとした時、ある言葉が目に入る。

”南極事件”

彼の知識にある南極事件とは、無論違つたろう。この世界にはگرانゾンもなければ、EOTも、連邦政府も、ゲストと呼ばれた異星人もない。

ともかく、そのサイトをクリックする。そこは、都市伝説や噂を扱ったサイトで、信憑性については疑問符がつくような内容、冗談のような内容ばかりだったが、南極事件については、嘘とも真とも判断をしづらかった。

何分、記述が極僅かだった。南極で発見された建造物を探索するために結成された篠ノ之束を含む調査団が、束をのぞいて全滅し、彼女はその事件を境に失踪した。

煽り目的の嘘にしては、記述が少なすぎ、真実と判断するには情報が不足しすぎていた。

しかし、彼の直感は訴えていた。これは、真実であると。直感に従い、クオヴレーは、南極遺跡調査団、と検索する。特に何も見つからない。

クオヴレーは、却って南極事件が、現実のものであると確信を強めた。何らかの理由で、闇に葬られたもの。そう思ったのだ。

もつとも、現段階では手がかりが少なすぎた。このことについては、後日、よく調べるか、とそこまで考えた時、部屋の扉をノックする音がした。

一夏か、とも思ったが、自分の部屋に入るのに、ノックする必要があるだろうか、と思い直すと、恐らくは別人だろう、との考えに至った。

「誰だ」

すると、ノックの主は、「セシリア・オルコットです」と名乗る。忘れるはずもない。自分が昼間、叩きのめした少女の名だ。

クオヴレーが、入っていいぞ、と許可すると、セシリアが、遠慮がちに部屋に入ってきた。その様子からは、昼間感じた、高慢な印象はうかがえない。

「何か用か」

クオヴレーはそう訊ねる。恨み言なら、セシリアに見切りをつけるつもりでいる。

「あの……私、私に」

セシリアは、どうやらその先を言うべきか否か、逡巡しているらしく、伏目がちに、思案している。

少し経つと、クオヴレーの目を見据え、何かを言おうとし、そし

てまた、伏目がちになる。

クオヴレーは、彼女の青い瞳が自分の瞳を捉えるたび、何かを言いたいのだろうな、とは当然察していた。

様子から見て、恨み言でもなさそうだが、とも感じている。それは、負の感情を向けているわけではない事からも分かる。

これまでの経験からして、クオヴレーは、悪意や敵意といったものには、過剰なほどに敏感なのだ。

「言いたい事が纏まらないようなら、纏めてこい。纏まっているのに言いくければ、気持ちの問題だ。気持ちを落ち着けてから来い」

クオヴレーが淡々とそう告げると、セシリアは救われたように、分かりましたと答え、一礼して去っていった。

彼女が去る姿を見ながら、見込みはありそうだな、とクオヴレーは若干ながら、評価を上昇させる。

それでも、過度な期待はしなかった。答えが出るのは、早くとも明日だ。それ以降になるかも知れない。

一夏の方は、セシリアと入れ替わりに帰って来た。

「遅かったな」

「いや、箒に呼び止められて、話をしてさ」

「昔話か？」

クオヴレーの言葉に、驚く一夏。

「あれ、箒は俺の幼馴染だって、どっかで話したっけ？」

「いや」

「ならどうして昔話だなんて、分かったんだ？」

「織斑千冬は、君と篠ノ之箒に面識がある、と言っていただろう。」

そこから推測できる」

中学は同じだったと聞いていないから、恐らく一緒だったのは小学生の頃だろう、だから、昔話と判断した、とも続ける。

「いや参ったな。迂闊なことは言えないぞ、こりゃ」

「何かあれば、織斑先生に報告だな」

ニヤリとした表情で、冗談めかすクオヴレー。一夏は驚き慌てて友達なんだからやめてくれよ、俺はまだ死にたくない、と言った。

言ってから、しまった、と言っ表情を浮かべる一夏。今のはナシで、と訴える。

体を震わせて訴える一夏を見て、クオヴレーはもう少しこの方向でいじってみよう、と考えたのか、意地の悪い笑みを浮かべ、無言で部屋を出て行くこととする。

それを止めようとする一夏は、声を震わせながら、頼む、頼むよ、友達だろ、とクオヴレーの制服の袖を引っ張り続ける。

クオヴレーは、一夏のその様子を見て、笑う。

「ははは、そうか、そんなに恐いのか。分かった、分かった」

「あ、クオヴレー、もしかして俺の事いじるためにそんなことしたのか!」

なおも笑ったまま、ようやく気がついたか、とクオヴレーは言う。

一夏は、一瞬意外に思い、そしてすぐさま、クオヴレーはこういう冗談を言う人間だということを読み出した。

例えば、初めて会った日、一夏が「何か食べたいものはあるか」と聞いたら、彼は、どちらとも取れるような様子で、幽霊でももらおうか、と返したのだった。

今日の世間話ではそんなことはなかったが、初めてあった日は、幽霊を食べる、以外にもいくつか冗談を言っていたのだ。

「分からないなあ」

「何がだ？」

「お前の事だよ。なんか普段は落ち着いていて謙虚な感じなのに、戦闘中は自信家だったり、冷静沈着で無口だと思っただら冗談言ってみたり」

「まだ出会って間もないからな」

クオヴレーがそう返したところで、またドアがノックされる。

来て初日なのに来客が多いな、と、自分の方がドアに近いこともあり、応対に出るクオヴレー。

「織斑千冬だ。そこに一夏はいるか？」

「はい」

クオヴレーがドアを開けると、声の主は、室内に入ってきた。背筋をピンと張って、堂々と歩くその姿からは、威厳が感じられる。

と、同時に、威圧感も存在した。

歴戦のクオヴレーはともかく、こういう雰囲気慣れていない人間にとつては、確かにこれはいささか恐いだろう、とクオヴレーは感じた。

もつとも一夏は、幼年から一緒に暮らしているはずで、この雰囲気におびえることはないはずなのだが、やはり千冬の姿を見るとおびえていた。

「なんだ一夏。私は化物でもなんでもないぞ」

一夏は、悪鬼か羅刹のようだ、といいそうになったのを、やっとの思いで飲み込む。

そんなことを言えば、用件を知る前に墓石に名前を刻まれる羽目

になりかねない。

「それにしても、いきなりなんのようですか？ 千冬姉、じゃなかった、織斑先生」

「今はいつもの話し方で構わない。用のほうだが、お前に渡すものがある」

「俺に？ それって、今からじゃないと駄目？」

一夏は、今日は疲れたから休みたいんだけど、と軽く言うと、次の瞬間にはその頭上に千冬の拳が振り下ろされていた。

「急な用でなければ、今頃来るか。大人しくついて来い」

「つつう……はあ。はいはい」

頭をさすりながらの不満そうな返事に、再び振り下ろされる拳。涙目になる一夏を千冬は一瞥し、返事は一回だ、と指導する。

そして、その場にいたもう一人の男、クオヴレーのほうを向くと彼に向かって「お前も来るか？」と訊ねた。

他にすることもないため、肯定の意を示すクオヴレー。千冬は、あくまで敬語を使うクオヴレーに対しても、普段どおりの話し方を許可する。

「了解した」

「それでも堅苦しいな」

「これは昔からだ。どうしようもない」

そんなやり取りをする両者を見て、一夏は驚く。少なくとも同年代で、出会ってすぐに自分の姉におびえずやり取りしている人間は見たことがなかったからだ。

これまで一夏が見てきた友人達は例外なく、その独特の威圧感に

気圧され、たどたどしい言葉使いとなっていた。

一夏は、姉がその事を、実はわずかながら気にかけている事も薄々ながら感じ取っている。

言葉に出されたことこそなかれど、それでも、初対面の友人が、どこかよそよそしく怯えた態度を見せるたび、わずかながら寂しげな様子を見せてきたのだ。

ずっとそんな姉の姿を見てきた一夏にとって、クオヴレーというこれまでのどの友人とも違った、どこかつかみ所のない男は、姉とも対等に話してくれる、本当に貴重な存在だった。

少なくとも、今までの彼の交友関係で、いつもどおりの話し方でいい、といわれてそれを実践できたものは、記憶になかった。

辛うじて近い事ができるといえば、幼馴染の2人と、姉の友人である束くらしいなものである。

なんだかんだといって、これまで自分を守ってきた姉に、彼は感謝をしており、その姉と良好な関係を築けそうなクオヴレーに、一夏は心の中で感謝する。

「一夏。何をぼーっとしている。用があるのはお前なのだ、上の空では困る」

「あ、ああ。ごめんよ」

「美人の姉に見ほれていたのか？ だが、それはよくないことだな。姉弟仲が良いのは良いことだが、良すぎても困るぞ」

悪戯つぼく笑うクオヴレーに対して、慌てて、考え事をしていたんだよ、と否定する一夏。

その一夏の否定よりも強く、そして素早い反応を見せたのは千冬の方だった。

鋭い視線でクオヴレーをにらみつけると、正に阿修羅の如きオーラを纏い、「教員に対してその態度とはな……後悔することになる

ぞ」と威圧した。

クオヴレーも、流石にいささか気圧された様子で、調子に乗りすぎた、と謝罪した。

後のクオヴレーが述懐したところによると、その威圧感は、「ケイサル・エフェスとシヴァー・ゴツツオと霊帝ルアフを足して3倍にしたようなもの」だったらしい。

この印象が強すぎて、実はこの後、千冬がわずかばかり嬉しそうだったのは、一夏も、クオヴレーも気がつくことはなかった。

そんなやり取りをしているうちに、目的の場所に近づいてきたらしい。

しばらく歩くうちに、すっかり常と変わらない様子になった千冬は、関係者以外立ち入り禁止、と書かれた扉の前に立つ。

懐からカードを取り出すと、それをカードリーダーに通した。鉄の扉が、重々しい音をあげながら、開く。真っ直ぐ進むと、再びカードリーダーがあった。同じように、千冬はカードを通す。今度は、エレベータだった。千冬に促され、一夏とクオヴレーが、まずエレベータに乗る。最後に乗った千冬は、地下三階を押した。エレベータ独特の、体が重くなる感覚がしばらく続く。それが終わると、扉が開いた。

扉の先の空間は、照明のせい、明るい。地下、ということもあるだろうが、不必要に明るく、一夏は、目が慣れるまでに多少の間を要した。

「千冬姉、こんなところに何があるんだ？」

一夏の疑問の答えは、千冬の指差す先にあった。

1機の鈍い銀色のIS。外見は、量産機とは思えない。つまりは、

専用機。

背部の、翼にも見える大型スラスタが、特徴的なシルエットを形成していた。

「あれが、俺に渡すもん、だって？」

「そつだ。『白式』。それが、お前の持つことになるISの名だ」

第3話 得るもの、得られたもの（後書き）

うう、結局、スパロボ作品から参戦させるものが出てきそうです。なんだか、人物描写（と呼べるほどのものかどうかは怪しいですが）に量割きすぎて、メインで扱いたかった篤さんがどっかいつてしまわれたでござる。千冬に関しては、ある程度独自の人物解釈が入りますが、その点はどうかご容赦下さい。

次回予告：篤さん、一夏の訓練につきあうから、ようやくまともに出せる。今度こそ、という言葉はあまり使いたくないものだが、今度こそ、篤さんにまともな出番を与えてみせる。

第4話 訓活する2人

「びゃく、しき？」

一夏は、しばし唾然とした表情を浮かべる。
そんな一夏の様子を気にも留めず、千冬は続ける。

「これは、お前の専用機だ。上からの命令でな、お前が持つべき
Sというわけだ」

その言葉を受け、一夏には、1つの疑問が浮かんだ。

「なあ、専用機って高性能なんだろう？」

「当然だ」

「なら、ゴードンの方がずっとよかないか？」

一夏も千冬も、当然、昼の決闘は見ている。彼らが目撃したのは、
代表候補程度は寄せ付けもしない、圧倒的なクオヴレーの技量だっ
た。

単純に実力を考えるなら、恐らくは素人の一夏より、クオヴレー
の方が数段上だろう。高性能機は、基本的に、エースに渡されるも
のだ。

千冬は、その疑問に答えて言う。

「上からの命令だ、といった。お前でなければならぬのだ」

千冬は、厳格な表情を崩さず、これは束から贈られてきており、
一夏が使うことは、束の希望である、とも告げた。

千冬という言葉は、淡々とした口調だったが、どこか苦々しげな感じ

を受けるのは、目的が分からない嫌悪感からだろうか。

それは、一夏とてうかがい知れない事だった。それよりも一夏が驚いたことは、束からのご指名、ということだ。

「束さんが俺に……？ 分かったよ」

一夏は、束に指名されたとあれば、最早断れないと知っている。それだけ、篠ノ之束という人間に巻き込まれる、という事は厄介なのだ。

一夏のうな垂れる様子を見て、クオヴレーは、まだ出あった事のない束に対して、マッドサイエンティストなのだろうな、とその性格を予想する。

そしてまた、マッドサイエンティストに目をつけられた一夏の、その多難な未来に対して同情する。研究狂というのは、自分の研究こそが全てで、他人への影響など全く考慮しないものなのだ。

しかしながら、束にとっての好奇の対象は、一夏だけではないこともクオヴレーは無論、理解していた。外から見れば、彼も同じ、ISを動かせる男性なのだ。

一夏もクオヴレーも、束にとっては、珍しい研究対象でしかない。

千冬は、そんなモルモットに選ばれてしまった一夏に目をやると、ただ一言「壊すなよ」とだけ声をかけた。それだけで、すぐに視線を一夏から外す。

一夏からも、クオヴレーからも、一夏に言葉をかけた後の、千冬
の表情はうかがえなかった。

或いは、大切な弟に、そんな言い方でしか心配している事を表せない自分に対する苛立ちなのかもしれない。いずれにせよ、この時の千冬の心は、千冬にしか分からない。

一夏は、ISスーツを着ると、『白式』にその身を収める。『白式』の指示通りに、コアの初期化、そして、最適化を行う。

専用機が専用機と呼ばれる所以は、この初期化と最適化にある。一般的なISコアとは、あらかじめ、パイロットのデータを入力しておく。しかし、専用機のコアは違う。

初期化とは、コアに存在するあらゆる情報をゼロにすることである。そして、最適化とは、搭乗者の生体情報にあわせた微調整を行い、文字通り、コアを専用機搭乗者に最適化するものだ。

最適化されたコアは、それ以降、完全に搭乗者に適応しようとし続ける。そのため、最適化を終えた機体を、別の誰かが動かす事は出来ない。

初期化が必要とされるのは、搭乗者にあわせるため、コアを、何の癖ももたない状態にしなければならぬからだ。

初期化と最適化。2つのシークエンスをあわせて、1次移行、と呼ぶ。

1次移行が終わった『白式』に、一夏は、体を動かして慣れようとする。理論よりも、実践した方が早く呑み込めるだろう、と考えたからだ。

幸い近くには、クオヴレーもいた。一夏はクオヴレーに、ISの動かし方をレクチャーしてくれ、と頼む。ところが、クオヴレーには断られた。

クオヴレーはその理由について、まだISの動かし方に慣れていないからだ、と説明し、それに対し一夏は、冗談を、といったが、クオヴレーは至って真面目な表情で、今日の模擬戦では、機体を激しく動かす事はなかったからな、と答える。

クオヴレーはその理由を、明快に説明してみせた。距離をとってビームをかわす事は、直線的な弾道である以上、発射のタイミングと角度を見れば難しい事ではない事、”ファンネルもどき”は、もつとも近かった1基を落とすただけだ、という事、その後は、動揺

したセシリアが、自滅しただけだった、という事。

順序だてた話に、一夏は納得し、同時に、これで不慣れなら、慣れたならば一体どれだけ強いのか、と驚きを新たにした。

「でもさ、それなら誰に教わればいいんだよ」

「篠ノ之箒がいる」

「そうか、箒だったら昔は剣道の稽古一緒にやってたし、ISの特訓にも付き合ってくれりかな」

「頼れるものは、頼った方がいいぞ。昔話でも間に挟めば、辛い時にでも多少気も紛らわせるだろう」

クオヴレーのその言葉に、それもそうだな、と相槌を打つ一夏。

それを聞いていたのか、やや遠くから2人の様子を見ていた千冬は、彼らの前にまでやってくると、そろそろ時間だから早く寮にもどれ、とやや不機嫌そうに命じた。

一夏はそれに従うも、無理やり引張ってきたのは千冬姉だろ、という呟きを聞きとめられ、またも鉄拳を振るわれる。

クオヴレーはその様子を見ながら、「雄弁は銀、沈黙は金」という格言を思い起こし、成る程、まさしくその通りのようだ、と、先人の知恵の価値を確認する。

「一夏。お前、『白式』をここに置いていくつもりではあるまいな」「どうやってこんなでかくて重いもの持って帰るんだよ。まさか、これつけたまま帰れって言うの？」と反論する一夏に、千冬は、待機状態にする方法も調べていないのか、と呆れる。

待機状態というのは、専用機のISが持つ機体の量子化能力の事である。ISの武装というものは、量子化され、必要に応じて呼び出せるようになってる。この能力は、機体そのものにその技術を応用したものだ。

一夏からしてみれば、そんなことは全く知らない。

初めてISに触れ、慣れようとするのに精一杯で、他の説明など全く見る余裕もなかったのだ。

慌てて『白式』の機能を検索すると、確かに、量子化、とある。

これか、とその機能を使う一夏。

すると、一夏を包んでいた鉄の装甲が消えると同時に、彼の腕に白いガントレットがつけられていた。

「これが、待機状態ってやつか。まるでアクセサリーだな」

正直な感想を語る一夏。クオヴレーから、携行するのには、アクセサリーとは最良の選択肢だろう、と言われ、納得する。

普段身に着けるものであれば、怪しまれる事はない上、持ち運びにも便利、ということだ。

ちなみに、待機状態においては、機体のメインカラーと同じ色のアクセサリーに変化することになっている。

例えば、セシリアの『ブルー・ティアーズ』は、彼女の左耳につけられた、青いイヤリングである。

「さてと、筈に頼むのは明日にするとして、今日のところは部屋に戻りますか」

「そうだな」

その日の夜、クオヴレーと一夏は、互いにISのマニュアルを眺めながら、その知識を得ることに時間を費やした。

クオヴレーと相部屋だった事は、一夏にとっては幸運だった。ISについてはともかく、機動兵器やパワードスーツの基礎理論、戦術理論については豊富な知識を持つクオヴレーは、それを基にISも理解していったため、必然的に一夏も、それを吸収することが出来たのである。

結局この日、一夏は寝るまで、クオヴレーによる講釈を一夏は受け続けた。

同じ日の夜。セシリア・オルコットは苦悩していた。彼女の苦悩は、1人の青年によるものだった。ノブを捻って、シャワーを出す。

立ち込める湯気の中に、その青年の姿が浮かんでくる。ウェーブのかかった銀髪。深い緑色の瞳。ISを動かす事の出来る、どこか謎めいた男。やけに、はつきりと浮かぶ。

自分は、代表候補という立場に誇りを覚えていた。それは確かだ。けれど、満足していたわけではない。その先があることも知っている。それでも 昼間いわれた言葉は、未だ胸の内で反芻されていた。

満足など、しているものですか、と強く否定しても、彼の言葉が頭を離れる事はない。心のどこかで、否定できない気がしているからだ。彼に敗北するまで、自分は、一体自分の肩書きをどう考えていたのか。

自分の肩書きを特別なものだと考え、自分は他者とは違う、と考えていたではないのか。思えば、初めてISを扱った時、自分は、父のように軟弱な男とは違う、と考えた。

これから国家代表候補だと告げられ、『ブルー・ティアーズ』を受領した時、同世代のIS乗りなどとは違う存在なのだ、と考えるようになった。いつの間にか、自分は特別で、そうあり続けるのが当然なのだ、と考えてしまっていた。

「私は結局、ただ、自分が特別で、人より優れていると、そんな瑣末なプライドを守る事に拘泥していたのでしょうか」

彼、クオヴレー・ゴードンは、そんな自分を打ち砕いた。容赦な

く。あの敗戦は、何の言い訳も、できないものだった。機体は、自分の方がはるかに優れていた。自分に何かハンデがあったわけでもない。敗戦の理由は、たった1つしかない。彼の方が、強かった。圧倒的に。

流れていく湯を見ながら、今日の出来事を、思い出す。

一度、自分より強かったのだから、彼から技術を学ぼう、と思いつき、彼のところへいった。応対に出た彼は、自分の顔を見ても、なんとも思っていないようだった。その姿に、埋められない差を感じた。まるで、昼間の結果など当然だ、と言わんばかりに見えたからだ。喪失感が、自分を襲った。

それでも、こらえて、教えを請おうとした。今度は、自分のプライドが邪魔をした。なぜ、こんな男に頭を下げるのか。いや、なぜ”男”に頭を下げるのか。国家代表候補でもなく、専用機を持つわけでもない男に。結局、言葉に詰まってしまった。

彼からは、それを見透かしたかのように、気持ちを落ち着けてからまたこい、と言われ、正直、胸をなでおろした。その時の、緑の瞳を思い出す。まっすぐ、自分を見つめていた瞳を。今思えば、自分を試していたのだろう。

いや、彼の言動そのものが、落ち着いて考えれば、自分を試すものだった。挑発的に聞こえた言葉の数々は、自分の考えを試し続けるものだった。見極められていたのだ。自分がどの程度なのか。或いは、これからどうしようとするのか。

「私は、強く……なりたい……」

まだ、国家代表には程遠い、ということを知った。実力だけではなく、今はまだ、その器でもない。

「真に代表を求めるものは、候補では何も勝ち取っていないと考え

る　　ですか。貴方に、一体、何が分かると言つんですの」

そう言いながら、納得してしまう。鏡に映る自分の顔は、なぜか微笑んでいる。あれほどまでに自分を挑発した男の事を考えている、と言つものにもかかわらず。

「セシリア、何が、おかしいというんですの」

問いかけてみるが、答えが掴めそうにない。答えを知るためにも、明日こそは彼と言葉を交わそう。そう決意して、バスルームを出た。

翌日の昼休み、クオヴレーは、昨日の晩と同じように、セシリアに声をかけられた。彼は昨日と変わらず、何か用か、と問いかける。

セシリアは、今度は覚悟を決めた様子だった。

「ゴードンさん。私を、私に、その、稽古をつけていただけますか」

「何の稽古だ」

「ISの稽古ですわ」

「それなら、俺はまだお前に稽古をつけられるような腕ではない」

クオヴレーの言葉に、驚きを隠せないセシリア。当然の反応だ。

自分を圧倒した相手に、君に教えられるような腕ではない、などといわれたのだから。

「まだ俺は、『打鉄』の機動に慣れきっているわけではない」

クオヴレーにとって、これは事実だった。アストラナガンなら話は別なのだが、彼はまだ、ISというものの拳動に慣れていなかった。外見をISにしたアストラナガンは、所詮、外見を真似ただけ

である。

その実際は、パワー道具化したアストラナガンそのもので、しかも、彼にとってはそれでの戦闘は経験のあるものだった。

ISは、またそれまでのパワー道具とは違った。基本は同じなもの、やはり、世界世界のパワー道具で、微妙な差異がある。能力が高ければ高いほど、そのわずかな差異が、違和感となって跳ね返ってくるのだ。

「そんな　。まさか、不慣れだと、おっしゃいますの!？」

「そうだ」

躊躇いなく、よどみなく答えたクオヴレーを見て、一瞬、セシリアは激しかける。だが、セシリアは、今度は、思い直すことに成功した。自分の欠点を、何のためらいもなく認められることも、また強さなのだ、と。

「分かりましたわ。ISについては諦めます。ですが　私、射撃寄りでありますから、射撃と、そして、戦うものの心構えくらいは、レクチャーしてもらいますわよ」

「それなら、できるな。いいだろう」

軽く答えたクオヴレーは、セシリアに、1つ条件がある、と付け加える。

「なんででしょう」

「ISの動かし方について、レクチャーしてもらいたい。動かしていればその内慣れるだろうが、なるべく早い方が望ましいのでな」

「　分かりましたわ」

セシリアがその条件に、一瞬躊躇し、結局受け入れると、クオヴ

レーは、笑みを浮かべた。彼女には初めて見せることになる微笑みを。セシリアは思わず、見ほれてしまった。

「どうした」

「その、ゴードンさん、そういう表情も、されますのね」

「俺も、笑うくらいはするぞ」

頬に赤みが差したセシリアに対し、クオヴレーは右手を差し出す。握手を求めている、と分かったセシリアも、右手を差し出した。

「これからよろしく頼む」

「分かりましたわ」

そういつてから、結局、昨夜なぜ自分が微笑んでいたのか、分からないままだったということに、セシリアは気がついた。

一夏の方も、箒に声をかけていた。声をかけられた箒は、わずかに頬を染め、肩を浮かせる。

「なんだ、一夏」

「いや、実はさ。俺、IS不慣れだから、ISの特訓してもらおうと思って」

「私にか？」

「うん」

「私でいいなら、いいぞ」

口調は平静を装っているが、声が、いささか上ずっている。喜色も滲み出ている。大抵の人は、箒が一夏に好意を抱いていると、理解するだろう。理解していないのは、好意を向けられている本人である。

「どうした筈、なんか、様子おかしいぞ？」

「な、なんでもないッ」

思わず、強い語気になってしまふ筈。その様子を、訝しがり、顔を覗き込む一夏。顔が近くなった筈は、益々慌てふためく。

「と、とにかく、私は旧知の仲といえど、甘い鍛え方はしないからな！」

「お、おう」

筈の、必死な様子に、思わず身を引いてしまふ一夏。それを見ると筈は、一步下がりがり、何事か呟く。怪訝に思った一夏が、声をかけると、短い悲鳴を上げ、走り去ってしまった。

一夏は、あまりの事に、追いかける事すらできなかつた。

「お、おい、筈！ 俺、何かしたっけ」

一夏は、伸ばした右腕を降ろすと、そのことについて考えをめぐらせたが、結局答えは見つからなかつた。その代わり、気がついたことといえば、次の授業は姉の授業だと言う事だった。

第4話 訓活する2人（後書き）

結局箒さん出番来たけど、凄くない。なんてこった……これが、計画性の無さだというのが。次回予告は、しないほうがいいかなあ。なんかまた流れ無視しそう。今回結局オルコットさんでした。箒派のかたがた、申し訳ございません。

第5話 お人よしの選ぶ道

その日の放課後には、一夏は箒との特訓を開始した。

一夏は、自分が専用機を持つていることを箒に伝える。

非常な驚きを見せる箒。その言葉の証拠に、左腕のガントレットを展開し、『白式』にする一夏。

「そうか。それが、一夏の機体か」

「東さんから俺に送られてきたみたいだぜ。千冬姉が言ってた」

「姉さんが、一夏に……」

箒は、何かを思いつめるような表情を浮かべる。姉から一夏に送られてきた、という事が関係しているのだろう。

彼女は姉が、一夏に厚意で専用機を渡したなどとは考えていなかった。妹の友人だから、などという感情的な部分では無いことは確かなのだ。

ISを使える男として、興味がわいたのだろう。

「悪い、東さんの名前、出さない方が良かったか？」

「いや、それは一夏が気にする事ではない」

「そうか。でも、あんまり抱え込みすぎるなよ」

「……ああ」

その言葉をかけられ、箒は、悩む。このまま、一夏にISでの戦い方を教えていいものか、と。

確かに、一夏とマンツーマンは、嬉しい事だ。それでも、一夏は、巻き込まれる必要の無い戦いに巻き込まれることになる。

一夏を守るほど、自分が強ければ、一夏がISにまつわることで事件に巻き込まれようと、一夏を守るはずだ。

そのための力が、自分にはまだ不足しているであろうという事が、嫌だった。一夏に教えるより、自分の鍛錬が先なのではないか。

「箒、箒さーん？」

「い、一夏、驚かすな」

「なんか、難しい顔して考え込んでっから心配でさ」

一夏は、優しい。彼が、姉のお遊びに巻き込まれてしまうのだから、か、と思うと、どこにいるのかもしれない姉に対し、抗議したくなかった。

（私が、私をもっと強ければ、力があれば……）

俯き気味で、悲壮な表情を浮かべる箒に、一夏は心配して声をかける。

「おい！ 箒、大丈夫か？ 悩みすぎに見えるぞ」

「な、なんでもない。稽古を始めるぞ」

「おう」

「私は、容赦しないからな。覚悟しておけ」

自分にまだ力が足りないなら、せめて、一夏と自分が力をあわせれば、乗り越えられるようになるだろう、そう思いなおして、特訓を開始した。

一夏の力は、彼女の記憶にあるものよりも、落ちていた。かつてやっていた剣道を、箒と離れてからはやらなくなっていたため、腕が鈍っていたのである。

まずは、剣道からやり直した、と、徹底的にしごきをいれる箒。

「ちょっと、箒、いくらなんでもスパルタすぎるって！」

「初めに容赦しないといたはずだ！」

息が荒くなる一夏に対して、まだ根をあげるにははやい、と続けさせる。

(これも、一夏のためだ)

篤は、自分に言い聞かせる。目の前の、想い人に対して、自分が出来る事があるとすれば、これだけだった。余りに小さく、余りに虚しいことだ。

それでも、自分に出来る事であるならば、全ての力をそこに注ぐしかない。

彼女のその思いは、苛烈なまでの特訓となって表れた。

もっと、もっと、もっと強く。力への渴望は、一夏へも、向けられていた。一夏が強ければ。自分が強ければ。誰も、一夏には手出しが出来ない。一夏に手出しをさせないだけの力を得るためならば、彼女は手段も選ばない腹づもりでいた。

彼女の視野には、一夏しかいなかった。

(一夏は、誰にも渡さない。誰の好きにもさせない。私がいる限り)

彼女のその決意は、苛烈で、曇りなく、そして危うさを孕んでいる。その事に、彼女は気がつくはずもない。彼女の意志はただ一つ。一夏を、護る事。

彼に降りかかるであろう火の粉を、振り払う力を得ること。その思いは愛ゆえに、あまりに峻烈だった。

篤は、このままでは一夏が壊れる、とは、思っていなかった。ただひたすら、一夏を鍛え、叱咤する。

「踏み込みが浅い、甘い、温い！ お前はそんなものだったか！」
「少しは、休憩、させてくれよ……ッ」

荒い息を吐き、倒れる一夏。それを箒は、無理やり起こそうとする。一夏は、さすがにその腕を、振り払う。ただし、力はなかった。振り払えたのは、箒が、虚を取られたからだ。

「箒、お前、ちょっと、激しすぎ、るぞ」

その言葉に、何か言いかける箒に対して、一夏は続ける。

「いくら厳しいつつつてもな、限度つてあるだろ。お前、なんか今おかしいぞ」

「私がおかしい、だと」

「何か悩みがあるなら、話してくれよ」

「私はッ！ 何も、どこもッ！ おかしくなどない！ 悩みなどない！」

叫ぶ箒。それから、しばらく、肩で息をし続ける。そして、大きく、荒い息を吐くと、ようやくにして落ち着きを取り戻した。

「済まない、取り乱していたようだ」

今日はここまでだ、と告げて、箒はその場を後にする。一夏には、それを走って追いかける体力など残っていないかった。

足も動かず、声も、絞り出せないほどだったのだ。一夏はただ、箒に対する不安を、胸の内に抱いたままにいるしかなかった。

誰もいないグラウンドの真ん中で、何かに押しつぶされそうな幼馴染の後ろ姿を見送るしかなかった一夏の瞳は、ただ悲しげだった。

一方のクオヴレーとセシリアの組は、この騒動は、全く分からなかった。

彼らは、校舎裏の空き地で、ひたすら射撃訓練に勤しんでいたからだ。

クオヴレーはセシリアに、基本の射撃から教えていくことにした。セシリアは最初、基本、と言われて渋ったが、クオヴレーから、基本が最も大事、と言われると、すぐさま基礎練習に取り掛かった。

仮想ターゲットを用意し、それを狙い撃たせる。セシリアにとっても、それは簡単なものだったが、クオヴレーは満足、とはいかなかった。

セシリアが、何が駄目なのか、と聞くと、狙いを定めるまでがまだまだ遅い、という返事だった。

「そう仰るなら、お手本を見せてくださるのでしょうか?」

不満の色を見せ、言葉がつい挑発的になるセシリア。

「いいだろう」

クオヴレーは、自ら仮想ターゲットを用意し、射撃を始めた。そのわずか十数秒には、セシリアは兜を脱いでいた。

1つのターゲットを壊す頃には、次のターゲットに狙いを定めているクオヴレーを見て、しばし言葉を失っていたほどだ。

ターゲットを全て破壊したクオヴレーは、自慢する事でもないかのように、ただこう言う。

「今回の的はとまっていたからな」

実際には、敵は止まっているわけではない、どう予測するかが肝

心だ、ともクオヴレーは言ったが、セシリアが予測について聞く前に、釘を刺し始めた。

「予測しながら撃つには、お前はまだ早い。今はいかに早く照準を合わせるかが問題だ」

「では、ゴードンさんが認めてくださるまでは、私は止まってるのを打ち続けるのですか？」

「それが基礎だからな」

「そうですね。ノルマが1つ、出来ましたわ」

嬉しそうな顔のセシリア。目指すところが、できたからだろう。

彼女は、真剣な表情で、ひたすら仮想ターゲットに狙いを定め、撃つ。

何度も何度も、その単純な作業を、繰り返す。クオヴレーは、彼女が撃ち終えるたびに、修正点をあげていく。それを基に、セシリアは次の射撃を行う。

十数回目の射撃の後、クオヴレーは、今日はここまで、と言った。まだやれる、と意気込むセシリア。クオヴレーはそんな彼女に、時間はある、焦らなくてよい、と告げた。

「やる気に溢れているのはいい。だが、体を休ませるのも訓練の1つだ」

セシリアは、引き下がる。代わりに、クオヴレーに気になっていたことを聞いた。

模擬戦の最中、自分を挑発した言葉についてだった。なぜ、オーレンジ攻撃を見慣れている、といったのか、である。

クオヴレーの答えは単純だった。相手の動揺を誘うには、ハツタリも重要だ、とそれだけの答えだった。

「では、あれはとつさの言葉、だといいますの？」

「そうだ。お前に効きそうな言葉だったからな」

「そういうの、卑怯ではありませんか？」

「覚えておけ。戦いに、そんな心は持ち込むな。挑発は、乗せられた方の負けだ」

「それって」

セシリアの抗議を、遮って続ける。

「勝てば官軍。揺るぎ無い真理だ」

クオヴレーは、その言葉とともに自室に戻った。

部屋に戻ったクオヴレーは、一夏がまだ戻ってきていないことに気が付いた。

どうやら遅くまでやっているようだな、とは思ったが、彼らの事は彼らの事なので、放っておいた。

しばらく経つと、一夏も部屋に戻ってくる。非常に疲労しているのが、見た目だけでわかる。それだけならまだしも、軽い擦り傷などが、一夏の体のあちこちにできている。

クオヴレーもさすがに疑問に思い、訳を聞いた。一夏は、放課後の出来事を、話す。話の終わりには、箒の様子が心配だ、と自身の考えも付け加える。

話を聞くと、クオヴレーも箒の状態を気に掛ける。彼が今まで見た限りで、そのような様子を見せた人物は、何かしら重荷があったからだ。

「明日、俺も話してみよう」

「大丈夫か？」

「友人が心配だ、といえば理由になるだろう」

「それなら、頼むよ」

翌日は、クオヴレーはその言葉通り、箒に声をかけた。

箒は、あからさまな敵意をクオヴレーにぶつけている。クオヴレーは、自分がこれほどの敵意を向けられるような事をした記憶がない。

一夏も、その箒の様子は予想外だったようで、固唾をのんでいる。もっともクオヴレーは、この程度で動じるような男でもなかった。平静な様子で、箒に言った。

「一夏の友人として言わせてもらおう。お前のやり方は厳しすぎる」

その言葉に、表情に更に険を加える箒。きわめて不快だという声色で、これが私のやり方だ、口出しするな、と突き放す。拒絶だった。

みかねた一夏が、割って入る。

「箒、ゴードンは、俺の話聞いて、お前の事も心配してこうして話してくれてるんだ！」

「ゴードン、ゴードンと、一夏、お前をよく知っているのは、お前と付き合いが長いのは私だ！」

「だからこうやって心配してるんじゃないかよ！」

「一夏はいい、なぜ得体も知れないこんな男に心配される必要があるー！」

何事か言い返そうとした一夏に、クオヴレーはそっと、ここまでだ、と合図を出す。

「そつか。余計なことをしたな」

クオヴレーは、席に着いた。彼は、箒が一夏に依存している、と感じた。これまでも何度か、そういう人間は見ている。危険だ、と思った。

厄介な問題でもあった。一夏を箒から引き離せば、彼女の精神がますます圧迫されていくことは目に見えている。かといって、放っておけば、一夏の限界が来ないとも言えない。

最悪は、これはどちらの手段をとっても起こりうることだが、箒が一夏に危害を加えることだ。

だが、クオヴレーの考えは1つだった。一夏が他の可能性を追い出した。彼は彼女を、突き放すことはしない、とクオヴレーに言ったからだ。

それならばクオヴレーは、最悪の事態が起こらないように努力することだ。ただ、原因は不明だが、クオヴレーは箒に嫌われている。

(困難な任務だな)

単に敵を殲滅するだけの任務より、はるかに難しい。何より自分が嫌われている、フォローもなにもしようがない。あの様子では、こちらからの関係の改善、といったこともできないことは明白である。

ならば、逃げ出すか。それは、否だった。確かに、このことは、平行世界の番人としての役割には、あたらない。しかし、1人の人間として、友と認めてくれた男を、見捨てることはできなかった。

随分、甘くなったな、とクオヴレーは思う。与えられた任務が全てだった、”生まれた頃の自分”ならば、こんなことはしなかっただろう。一夏など、どうでもいい、そう思っていたはずだ。

けれど、彼は、非効率な行為というものの、素晴らしさを知ってしまった。自分の周りにいたのが、とんでもないお人よしばかりだったからだろう。彼もまた、お人よしになっていた。

それを後悔などはしていない。そう望んだのは、そういう自分になったのは、自分自身で選んだことだからだ。

一夏も、お人よしだ。彼もまた、自分から望んで困難で、危険な道を選んでいる。それも、自分自身の利益ではなく、ただ、幼馴染が心配だから、などという理由で。

或いは、クオヴレーが一夏と距離を取る、という道もある。ただそれは、本質的な解決にはならず、問題の先延ばしにしかならない。

一夏は、クオヴレーとも、筭とも距離を置かないことを選んだのだ。

クオヴレーはただその一夏の意志を尊重し、僅かながらでも、力になることを誓う。その日3度目の休み時間に、彼はそのことを伝えると、一夏は、「ありがとな」とクオヴレーに感謝の意を伝えた。

これからが重要だ、とクオヴレーも一夏も思う。この日、窓から見える空模様は、鉛色だった。

第5話 お人よしの選ぶ道（後書き）

おかしいな、篝さん出番来たと思ったらヤンデレっぽくなってるじゃないですか。

一応ヤンデレ要素は備えていそうだけど。これから篝さん中心に描写していきそうです（何

次は鈴が登場する番ですかね。って、あの子どう扱えばいいんだ…

…w

あ、今更ながらTwitterやってます。アカウントはnobe2525です。ご質問などあればこちらにもどうぞ。

第6話 幼馴染

クオヴレー達の特訓を始めてから、1週間が経過した。

その間に、セシリアはタイムを更新し続け、クオヴレーからはあと少しで次のステップにいける、と言われるまでになっていた。

一方の一夏も、クオヴレーがあえてあまり表だって関わらなかつたこともあり、落ちて着いていた筈のもとで、鈍っていた腕がある程度取り戻していた。

それでも、擦り傷などは絶えなかったが。一夏によると、初日で反省したのか、それからはいくらかマシになっていったとのことだ。

そんな日常が繰り返されている日、1年1組に見慣れぬ顔が現れた。小柄で活発そうなツインテールの少女が、姿を見せたのである。彼女は入ってくるなり、クオヴレーの名を呼んだ。クオヴレーからすれば、何者か全くわからないが、ともかくクオヴレーはその少女に挨拶しに行く。

それまで話し込んでいた一夏が少女を見て驚いているのを見ると、どうやら一夏の知り合いではあるらしい。

「あんたが久保……言いづらいわね。ゴードンなのね」

「ああ」

「私は2組の鳳鈴音^{ファンリンイン}。中国の国家代表候補生よ。あんた、クラス委員決める時の模擬戦で、専用機持ちに量産機で勝ったみたいね」

「それがどうかしたか」

クラスメイトは見慣れた光景だが、一切変化を見せずに答えるクオヴレー。どうやら鈴音にとっては、それが気に障るらしい。

「私をその専用機持ちと同じだなんて思わないことね！ クラス代

表對抗戦、覚悟しておきなさいよ！」

まくしたてられたクオヴレーは、あくまで落ち着いて、お互い頑張ろう、と声をかけて握手を求めた。

鈴音は、その手を払いそうになったが、結局は握り、それから急にまた落ち着かなくなった。

そしてクオヴレーに、織斑一夏はいるか、と尋ねる。クオヴレーがそれを受け、一夏を呼ぼうとしたときにはすでに、彼の隣に一夏は来ていた。

「久しぶりだな、鈴」

「い、一夏！ あんた、昔の約束……覚えてる？」

そういわれ、思案する一夏。腕を組んだまましばらく唸る。

クオヴレーは一夏と鈴音の様子を交互に見ながら、鈴音が一夏をどう思っているか悟っていた。もっともクオヴレーはそれとなく手助けするようなことはしない。

やがて、手をポン、とたたく一夏。顔が期待に輝く鈴音をよそにクオヴレーは冷静に、おそらく重要なところで違っただろうな、と察しを付ける。

伊達にこの手の人間を何度も見てきてはいない。

「ああ、思い出した！ あれだよな、毎日酔豚作ってくれるっていうやつ！ いや、食費浮くからなー、助かる申し出だったな」

鈴音は、中途半端に思い出して、という表情を浮かべながらも、必死になってその先を思い出させようとする。

身振り手振りも交え、一夏に自分にとって一番重要な部分を言わせることに知恵を尽くす鈴音。

クオヴレーはそんな一夏を見ながら、さてどうしたものかと考え

る。

「一夏。酢豚だけでは、栄養バランスに偏りが出るのではないか？」
「うーんでも、作ってもらえるのにそんなこと言うのも失礼だしなあ」

周囲から、そうじゃないだろ、という視線を浴びながら会話を続ける2人。もっともクオヴレーはわかってやってているから始末に負えない。

この会話を、啞然とした様子で眺めるのは鈴音。まったくもって論点が違う。そしてクオヴレーに対しては、一夏と同じ部類なのかと驚愕してもいた。

そんな様子には気づかぬまま、会話は続けられる。

「やっぱりクオヴレーの言うとおり、ダメもとで頼んでみるべきかなあ」

「そうしたらどうだ？ もっとも酢豚以外作れないのかもしれないが」

「それはないと思う」

鈴音が中華料理屋の娘だということクオヴレーに話す一夏。

「ちよつと、私が蚊帳の外になっていないじゃない！ 大体私と一夏の話でなんであなたが出張ってくるのよ！」

「友人の食生活だからな」

「なんであなたがそんな心配……そっちの気でもあるの!？」

サツとその身を後ろに跳ねさせ、一夏を手招きする鈴音。ハツキリ言って滑稽である。

なお、彼女の発言に一部の淑女の方々が鼻血を吹いたのは、ここ

では関係ないので流しておく。

クオヴレーは内心、想像以上にいじると面白いな、と鈴音を評価し、あえて先ほどの発言を否定しない。

「どうだろうな……フッフ」

いかにも怪しげで悪い笑みを浮かべ言っただけ。

そんな反応に、心底焦った表情で一夏に対し、必死の説得を行う鈴音。

「一夏！ そいつ危険だわ！ は、は、はやくこっちくるのよ！

今ならまだ間に合う！ その久保なんとかから逃げるのよ！」

「久保じゃないぞ、鈴。久保レ、って違うなクオヴレー」

「ようやく発音できるようになったか」

「やったぜ、とそれは置いてだな、クオヴレーがそんなんだったら、言われる前に逃げ出しているよ」

ようやく頭が冷えてくる鈴音。思考回路を必死に正常に戻そうとする。

「じゃ、じゃあなんであんなこと」

「最初に暴走したのお前だろ」

「うるさいわね！ なんて否定しなかったのかってことよ！」

顔を赤くしての鈴音の抗議に一夏は、からかっただけだと思う、と答え、クオヴレーの方を見る。

「ああ、からかっただけだ。中々面白い反応を見せてくれたな」

肩を竦めてそういったクオヴレーに対し、反応を見せたのは言わ

れた鈴音ではなく、後ろで好奇心丸出しで事を眺めていたクラスメイトだった。

どうやら、ミステリアスで物静かなクオヴレーが、ジョークも言うような人間だとわかって益々評価が上がったらしい。

色々な声が聞こえてくる。

「こ、この久保！　もしかして酢豚云々も私をからかうためだったの！？」

「そうなのか、クオヴレー？」

「食事に関しては純粹に栄養的観点から見ただけだ」

そっちは素かよ、とおそらく一夏を除く全員がツツコミを入れたくなつたに違いない。

誰一人として、わかつてやっていてるとは気付かなかったようだ。普段の言動はまさにこういう時にモノをいう。

もっともクオヴレー自身、からかったりはするものの、自身の交際経験などというものはほとんどない。

彼の使命もあるが、彼自身女遊びなどは曲がり間違つてもやらないのは確かである。

というわけで、色々クオヴレーのいいようにかわされた鈴音は、顔を赤くしながら「あんたなんか久保よ！　久保野郎で十分だわ！　対抗戦覚悟しときなさいよ！」だとか捨て台詞を残して、教室を去って行ってしまった。

「元気なやつだな」

駆け去った後姿を見て、他人事のように呟いたクオヴレーを、一夏は肘で小突く。

いつもより強いんですけど、とこちらもいつもより強めの語気で姉の一撃に不満の声を上げる。

それがいけなかった。再び襲撃者と化す出席簿。2発目は一夏に声も出させないほどの一撃となる。

「フン、弟ながら弛んでいるな。ゴードン、お前が付いていながらこれが」

唐突に振られるクオヴレー。ちなみに彼の机にはきっちり準備が整っている。

「授業の準備まで面倒を見るといわれましても」

「……………。言われてみればそうだな」

気絶している弟を一瞥し、その体をゆする千冬。

一夏は、目覚めない。何度か試したが、同じだった。千冬はため息をつく、情けない、とつばやき、授業を開始した。

結局、授業半ばに目を覚ました一夏は、起きた時点で廊下に立たされ、授業の終わりまで手持無沙汰にしていた。

一夏が廊下に立たされ20分もしたころ、授業の終了を告げるチャイムが鳴り、それを聞いた千冬が教室を去るがはいか、一夏は箒に声をかけようとす。

「後にしてくれ、私には用事がある」

先ほどの意味ありげな表情はどこへやら、まったく相手にすることなく、箒は廊下を走って行く。

一夏はそれを目で追ったが、目的地はどつやら隣の2組だったよっだ。

「さつき私のクラスに来た2組の代表とやらはいるか！」

箒がそう叫ぶ。誰がみても、友好的な態度ではない。

鈴音もそのようで、初めから剣呑な様子で出てきた。

「何よ、あんた」

「私は篠ノ之箒。単刀直入に聞くが、一夏とはどういう関係だ」

「は？」

「一夏に毎日食事を作るなど………どういう関係だと聞いている」

鈴音は最初呆気にとられた顔をし、次に箒が一夏をどうおもっているかを悟った。

それから優越感を抱き、得意げな顔で「私は一夏の幼馴染よ。だから酢豚作るって言ったの」と言った。

悔しげな表情を浮かべ、そしてそれを吐き出すように、箒は言った。

鋭い声で。

「私が幼馴染だ！ どうして貴様が幼馴染だのと」

「それには俺が答えるよ」

騒ぎを聞きつけたのだろう。箒の尋常でない様子も気になった一夏は、2組の教室の入り口のところで言い合っている2人の前にやってきた。

鈴音も箒も、どちらも驚いている。いつも一緒にいるクオヴレーは、万が一に備えて1組前の廊下から見守っている。

「一夏これっていったい」

「どづいことだ」

2人揃って鬼の形相を浮かべているのを見ながら、内心、こんなことは仲良くやれるのかよ、と思いつつも、一夏は説明を始める。

「箒が転校したのと入れ替わりで、鈴が入ってきたんだよ。だから箒はファースト幼馴染で鈴はセカンド幼馴染ってやつかな」

聞いていたクオヴレーは、ファーストとかセカンドとか呼ばれる少女達を見て、思わず微笑んでいた。

鈴は多少、セカンドに近いかもしれない。そういえば髪型も同じである。

それにしても、よくもまあ女性と縁があるものだな、などと自分の事を棚に上げて一夏を見る。

「どうやら、お互い幼馴染ってのはアドバンテージにならないよね……」

「言っている、食事で釣ろうとするお前などに」

「そーいうあんたは作れるの？」

箒が何か言うより早く、一夏が答える。

「そりゃ駄目だぜきつと。箒は調理実習でおにぎりだって作れなかったからな。そのたびに次こそは本当の篠ノ之箒を見せてやるとか」

それまで厳しい表情を浮かべていた箒は、急に顔を赤らめ、一夏に対して必死に弁解やら抗議やらを始める。

「ああああああれは、その、次はよくなると思っただな！」

「よくならなかつたじゃん」

「いいや、あれから大分練習したんだ！ 今度はうまいって言わせ

「やるぞ！」

「へー、箒が料理を必死に練習か。好きな人でもできたから、お嫁になる修行とかか？」

軽くのたまう一夏。知らぬが仏とはよく言ったものである。

目の前で茹でダコと化した箒を見て、笑いながら続ける。

「お、凶星か？ いやー、剣の道一筋の箒にも遂についてやつか！
誰かな誰かな」

「お、お嫁なら、い、一夏の」

「俺がどうしたって？」

「なんでもない」

脱兎のごとく駆けだした箒を見やりながら、一夏は、時々わからないなあ、と呟く。

鈴音といえば、恋敵とはいえ、流石に同じ男に恋したある種の仲間として同情を禁じえず、同時に自分の前途に対しても暗澹たる思いを抱く。

「なんだよ、鈴」

ジト目で見られていることに気が付いた一夏が、聞く。

「一夏。前から思ってたけど 鈍いわね。ホント」

「は？」

鈴音が教室の中にその身を隠すと、一夏は2人揃ってなんだよ、と言って1組の前まで戻る。

今度は、どこか楽しい表情のクオヴレーから声をかけられた。

「青春しているな、一夏」
「お前までなんだよ」

結局この日一夏は、この疑問について一日中考えた挙句、答えを見つけれなかった。

その上、授業が頭に入らなかった。唯一の幸運と言えば、すでに姉の授業が終わっていたことくらいなものだろう。

第6話 幼馴染（後書き）

大分遅れてしまいました。

おはよう鈴。それにしてもヒロインの登場ペースの遅さといったら。

鈴は便利屋になってくれそうです。ネタ的に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6068v/>

IS ~ The Gate War ~

2011年10月9日14時17分発行